

# 丹波育児院

～辻原光治とその周辺の人々～



五十嵐喜広(1872～)

## 日本育児院・五十嵐喜広

若き日に石井十次の岡山孤児院に触発された辻原光治は、三三歳になって自ら育児院を創設します。そのときは既述のとおり日本育児院の「京都分院」として出発しました。今回は、その「本院」＝日本育児院について見ていきます。

日本育児院を創設したのは、五十嵐喜広(一八七二～一九四四)です。五十嵐もまた熱心なキリスト教徒でした。五十嵐は明治五年(一八七二)、山形県湯野浜(鶴岡市)で誕生、二歳で父を、六歳で母を亡くし、長兄喜一郎

夫妻の手で育てられました。五十嵐は大変な悪童で、地元の若妻や娘たちが通りがると二階から彼女らの頭部に向けて放尿したとか、大岡越前守にあこがれて法律を学ぼうと家から大金を持ち出して東京へ家出したが、悪友と性病を得ただけで帰郷、兄の逆鱗に触れて座敷牢に監禁されたなどというエピソードを残しています。

松村介石は、植村正久、内村鑑三、田村直臣とともに「キリスト教界の四村」と呼ばれた人物で、明石出身、横浜で受洗し、岡山の高梁教会牧師や『基督教新聞』主筆を経て北越学館へ内村鑑三の後任として招かれました。松村は生涯五十嵐のよき理解者となり、顧問として事業に協力しました。

## 山中で孤児を「拾う」

五十嵐は新潟で洗礼を受け、岐阜でキリスト教の伝道に従事します。

十七歳で庄内中学校に入学した五十嵐は、校長・藤生金六(一八五九～一九〇七)に出会い、その聖書講義に参加します(藤生は野口英世に洗礼を施した人です)。

あるとき新潟の北越学館から松村介石(一八五九～一九三九)が来校、その講演に感銘を受け、北越学館に転校します。

伝道中の明治二八年(一八九五)四月、山道で泣いている男児に出会います。孤児であることがわかると見て捨てることができず自宅に連れて帰りました。これが育児院の始まりとなり、五月、古川町(岐阜県飛騨市)で素封家より家屋の無償貸与

を受け、「飛騨育児院」を設立します。しかし、豪雪地帯である飛騨(岐阜県北部)の冬は非常に厳しく、九月十二月には困窮を極め、五十嵐と児童七名は絶食を余儀なくされます。衰弱した子供たちに実情を告げ、各自ここを出て誰かに助けを求めよう論じましたが、彼らは五十嵐とともに天国へ行くことを望みました。餓死を覚悟した七日目の晩、何者かにより白銅貨(五銭)一枚が破れ窓から投げ込まれ、これでお金を買い、なんとか命をつないだといえます。翌二九年から七名を連れて岐阜・愛知・三重を講演に巡回し、善意の寄付を得てようやく危機を脱しました。同年五月、岐阜市内に施設を移して「濃飛育児院」と

改称、西濃地方大水害による二十余名の不遇児も収容します。

## 押し強さで事業拡大

賛同者が増え順調な歩みに入ると、明治三十年の愛知県豊橋を皮切りに、三一年東京、四十年京都(辻原の丹波)など次々に分院・支部を展開し、その数は国内八か所、海外五か所(朝鮮・カリフォルニア・台湾・満州・樺太)に及びました。



日本育児院(本部)の子どもたち

丹波教会が義援金五円七

五十嵐は外交的手腕があり、押しも強く、名士を訪問しては揮毫を願ったり寄付を買ったりして世人を驚かせました。三九年には伊藤博文から「日本育児院」と命名を受けています。大口寄付者には、大隈重信や三菱財閥の岩崎弥之助・久弥などが名を連ねています。

## 幻燈会の丹波来演

辻原と五十嵐・日本育児院を結びつけたのは、やはりキリスト教でした。

『丹波基督教会史』には「何度か『濃飛育児院』との交流が記録されています。

明治三十年(二月)には丹波教会が義援金五円七

五銭を「濃尾孤児院」へ贈っています。濃尾は「濃飛」の誤記で、のちの日本育児院のことと思われます。

翌三一年には「濃飛育児院幻燈会」が丹波へやって来ます。九月一日、松山会堂にて幻燈会「六円余の義援金あり」となっています。一二日に須知会堂で十円余、一三日に須知小学校で「盲児峰一児の演説読書等」、一四日園部で十五円余衣類数点、一五日水所で十六円余衣類数点、一八日亀岡で六十円其他衣類物品の寄贈を受け、「いづれも意外の同情を得たるは実に感謝すべし」と記されています。

この来演があったのは辻原が綾部の蚕糸講習所で学んでいた時期ですが、かねて関心のあった孤児院の

来演ですから辻原は当然、

参加し関与したのと思われれます。

日本育児院と丹波教会の関係は、五十嵐自身の著書『濃飛育児院』(明治三六年)にも現れてきます。

同書には育児院の「賛成者」(救済委員)として、波多野鶴吉(丹波)、田中敬造(石符)、前田英吉(北海道)、芦田謙造(須知)、村上太五平(亀岡)、谷口嘉平(亀岡)の名前が出てきます。いづれも丹波教会の中心だった人物ばかりで、田中や前田は北海道移住後も支援していたことがわかります。

さらに五十嵐と丹波の奇縁は、五十嵐が新潟時代に洗礼を受けたのが堀貞一牧師からだだったことです。

堀貞一(一八六三～一九四三)は、丹波教会の初代牧師。亀山(亀岡)藩の重臣の長男

で、同志社の学生時代、新潟から「お前はまだ若すぎてあかんといわれたが、そんなら勝手に伝道してきますいうて」二銭で草鞋を買って丹波へやってきたと自ら語っています。

卒業後、長浜教会(滋賀県)へ赴任し、明治二十年七月から七か月間、丹波教会の牧師を兼務しました(その後任が前々回紹介した留岡幸助)。堀は新潟へは二三年から派遣され、後にはハワイへ渡るなど長く活躍しました。

辻原と五十嵐がいつどのように出会ったのか、本院と分院の関係がどんなものだったのか、残念ながらいまはこれ以上はわかりません。しかし、背景にキリスト教の精神と人脈があったことは確実です。(山下幾雄)